

アドラー心理学に基づく育児プログラムの原理と 数学教育との親和性 — Passage と SMILE を比較して —

松岡 学*

(受領日：2021年5月31日)

高知工科大学共通教育教室
〒782-8502 高知県香美市土佐山田町宮ノ口185

* E-mail: matsuoka.manabu@kochi-tech.ac.jp

要約：本研究ではアドラー心理学に基づく育児分野のプログラムの原理を調査することで、教育分野への応用を目指すことを目的とする。具体的には、日本に普及している育児プログラムの代表的なモデルケースとして「Passage」及び「SMILE」を比較し、その類似点や相違点を論じる。教育に関しては特に臨床数学教育の立場から、アドラー心理学の適用可能性を考える。臨床数学教育は非認知的な能力に焦点を当てた数学教育であるため、アドラー心理学との親和性が高いといえる。最後に、アドラー心理学に基づく教育手法を身に付けるための研修体制について考察する。

1. 研究目的

教育の大きなテーマとして、「主体性」及び「協働性」の育成があるが、これらは知識ではなく実践的に身に付けるべき能力である。しかしながら、これらは非認知的な能力であり、育成が容易ではない。そこで本研究では、アドラー心理学に基づく教育方法を考えることで、数学教育においてこのような非認知的な能力の育成を目指す。具体的には、臨床数学教育の立場から、アドラー心理学の有用性を吟味する。

近年、蟹江(2009)、浪川(2012)、丹羽他(2009)等で論じられているように、数学教育においては非認知的な能力が重要であることが明らかである。特に、蟹江(2009)が提唱した臨床数学教育では、「数学嫌い」を減少させるために、数学によって「生徒の心を耕す」ことを大きな目的としている。これは教師の技量とも関わり、容易なことではない。

そこで、このような数学教育を実践するにあたり、「勇気づけ」を軸としたアドラー心理学の手法が有効に機能することを示すことが、本研究の大きな目的である。

先行研究として、古庄(2001, 2007)はアドラー心

理学と学校教育の展開について一般的な立場から考察を行った。教員養成数学科教育の立場からは、松岡(2019)がアドラー心理学を用いたカリキュラム構築の可能性について論じた。そこではアドラー心理学の普及において、教育分野より育児・保育分野の方が先行していることを指摘し、教育に適用する場合は育児分野のプログラムをモデルケースとすることが現実的であると提案されている。

育児分野におけるプログラムの比較としては、先行研究に鎌田(1993)がある。この論文では、当時アメリカから輸入されたアドラー心理学に基づく育児プログラムであるSTEPと日本で独自に開発された育児プログラムであるSMILEを比較し、分析・考察している。その後、SMILEとは別の育児プログラムであるPassageが日本で開発された。Passageは日本アドラー心理学会の協力もあり、全国で開催されるようになる。

大学の教員養成との関わりに関する実践研究としては松岡・日熊(2018)があり、この論文ではアドラー心理学に基づくアクティブ・ラーニング型授業における実践報告が行われている。日熊は琉球大学教育学部における数学科教員養成において、グ

ループワーク型の授業を実施することで実践研究を行った。その結果、アドラー心理学の手法が数学教育に有効であることが実践的に徐々に明らかになってきている。特に、アドラー心理学の手法が教師自身の指導力を高めるための自己研磨として意義が高いことが前述の松岡・日熊(2018)にて指摘されている。

このような流れの中、本論文ではアドラー心理学に基づく育児プログラムの代表的なモデルケースとして、Passage及びSMILEを比較し、その類似点や相違点を論じる。

現在の日本において実施規模やプログラムの系統性などを考慮すると、PassageとSMILEをモデルケースとして、教育分野への応用を見据えて考察することが、学術的に意義が深いと考えられるからである。また、育児分野のプログラムの考察を踏まえて、アドラー心理学と数学教育の親和性及び教育関係者への研修について考察する。

2. アドラー心理学による育児プログラム

2.1 アドラー心理学の理論的な側面

アドラー心理学は教育や保育への効果が高いことが知られており、教育・保育分野に適用されることが期待される。

実際、アドラーは診療や講演、著作活動だけでなく、学校や家庭の教育にも積極的に取り組み、1924年にはウィーン教育研究所治療教育部門の教授に就任している。しかしながら、アドラーは理論の整備より、実践的な活動に力を入れており、後に弟子たちによりアドラー心理学の理論が整備されてきた。それは、アドラー心理学をより多くの人々に広めたいと、アドラーが考えていたからである

アドラーの弟子であるドライカースは、理論体系の構築に非常に大きな貢献をした。ドライカースはアドラー心理学を教育の分野へ積極的に取り入れた。また、アメリカでアドラー心理学を広めるべく尽力し、北米アドラー心理学会を設立した。ドライカースが整備した理論は現代のアドラー心理学に受け継がれている。

アドラー心理学の抽象化に関しては、ハイツ・アンスバッハーとロウェナ・アンスバッハーの貢献が大きい。アンスバッハーらはアドラー心理学の特徴を12項目に分けて抽象的に抽出した。それを受け継ぎ、現代のアドラー心理学では5項目に分類された「5つの基本前提」が広まっており、アドラー心理学の公理として理論的な出発点となっている。基本前提については、野田(1998, 2002)を参照された

い。また、日本ではアドラー心理学を「理論・技法・思想」の3領域に分け、基本前提を「理論」、勇気づけを「技法」、共同体感覚を「思想」に分類するのが通常である。歴史的に見たアドラー心理学の学校教育への展開について、詳しくは古庄(2001)を参照されたい。

2.2 PassageとSMILEの開発

ドライカースは問題を抱えた子どもの親や教師のための勉強会形式のグループ・セッションを開発した。それは、テキスト輪読とディスカッションを中心とした内容であり、「スタディ・グループ」と呼ばれた。

その流れの中、1976年アメリカでアドラー心理学に基づく親子関係のトレーニング・プログラムSTEP (Systematic Training for Effective Parenting)が開発され、1982年に日本にも輸入・翻訳された。

1986年、日本独自のプログラム開発として、野田が中心となりアドラー心理学に基づく育児プログラムSMILE (Seminar of Mother(Father)-Child Interaction with Love and Encouragement)を開発した。開発の経緯は、つるた(2020)に記されている。

また、1998年には、野田はSMILEとは別に育児プログラムPassage (Parent Study System on Adlerian Group Experiences)を開発した。

やがて、野田はSMILEの運営から離れ、東京のヒューマン・ギルドが監修・改訂を行うようになる。ヒューマン・ギルドは岩井俊憲を代表とし、ジョセフ・ペルグリーノを最高顧問とする団体である。SMILEの認定講師の養成もヒューマン・ギルドが行っている。SMILEのテキストは講座用であり、一般販売はされていない。

一方、Passageはその発展講座であるPassage Plusと共に、アドラーギルド、アドラー心理学会などが協力し、運営や認定講師の養成を行うようになる。アドラーギルドは野田が立ち上げた団体であり、野田は日本アドラー心理学会初代会長である。Passage及びPassage Plusのテキストは、日本アドラー心理学会を通して一般販売されている。

現在の日本ではPassage、SMILE共に、全国に認定講師が存在し、比較的少人数で対話を重視しながら講座を開講している。

それとは別に日本アドラー心理学会では、全国それぞれの地域で自助的な学習をするための「自助グループ」を推奨している。自助グループはボトムアップ的な集まりであり、カウンセラーや育児分野の認定講師なども含め、アドラー心理学を学ぶ人々

にとって自主研鑽の場となっている。自助グループの調査に関しては、中井 (2008) をみられたい。

2.3 Passage と SMILE の構成

本論文では、育児プログラムの代表的なモデルケースとして「Passage」及び「SMILE」を比較し、その類似点や相違点を考察する。プログラムの内容としては、2018年時点での Passage 及び SMILE 両者のテキストに基づき比較する。

Passage と SMILE の目次は次の通りである。

- Passage 目次

- 第1章 子育ての目標
- 第2章 賞罰のない育児
- 第3章 課題の分離
- 第4章 共同の課題
- 第5章 目標の一致
- 第6章 体験を通じて学ぶ
- 第7章 新しい家族
- 第8章 積極的に援助する

- SMILE 目次

- 第1章 子どもの行動を理解しよう
- 第2章 聴き上手になろう
- 第3章 子どもを勇気づけよう
- 第4章 誰の課題でしょう
- 第5章 子どもを傷つけないで意見を伝えよう
- 第6章 体験を通じて学ぶ機会を与える
- 第7章 新しい家族のあり方
- 第8章 社会性のある子どもに育てよう

開催方法としては、Passage は1章につき2時間半かけ、8回(8日間)のコースとなっている。もしくは午前と午後など、1日で2章分を学習する4日間のコースもある。各回の開催では約2週間から3週間ほど間をおき、その間に実際の育児で実践をすることとなる。

SMILE は1日で2章分を学習する4回(4日間)コースと、連続2日間で8章すべてを学習する集中コースがある。近年、オンラインコースなども実施されるようになった。オンラインは1日で1章分を学ぶ8回(8日間)のコースである。

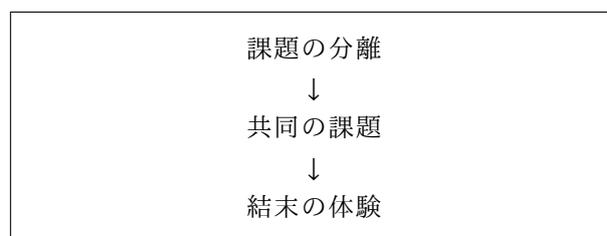
目次の構成や開催方法など若干の違いはあるものの、Passage と SMILE の開発は共に野田が中心に関わっているため、どちらも基本的な設計は共通している。

関連する書籍に関しては、Passage の直接的な解説として、清野・岡山(2018)がある。三宅・岩井(2017)は SMILE の直接的な解説ではないが、著者の三宅

はヒューマン・ギルドの認定講師として SMILE を定期的開催しており、SMILE のアドラー心理学観を理解するのに適している。

2.4 共通の原理

Passage と SMILE には共通した大きな柱(原理)がある。それは、育児において次のプロセスを経ることである。



「課題の分離」とは、子どもの課題と親の課題を明確にすることである。アメリカでアドラー心理学を学んだ野田が、日本にアドラー心理学を導入する際、「課題の分離」の概念を明確にし理論の中に大きく組み入れたことが始まりである。

類似の概念として、アメリカの STEP において「Problem Ownership」があるが、「課題の分離」ほど前面に押し出されていない。このことを含め、STEP と SMILE の比較については、鎌田(1993)にて詳しく論じられている。

アメリカと比べ「課題の分離」が強調されている背景としては、日本には「察する文化」があり、育児においても過干渉になりやすく、それを防ぐために「課題の分離」を概念として明確にすべきだと野田が判断したからだと考えられる。このようなことから、日本のアドラー心理学では、「課題の分離」は広く認知されている。課題の分離をした後、共同の課題を作るプロセスに入り、場合によっては結末の体験へと進む。これは、子どもの主体性を尊重した育児であるといえる。

Passage と SMILE は共に、このような大きな原理に貫かれている。また、プログラムの後半では「家族会議」を開催する方法を学ぶことになる。

Passage と SMILE は、このような流れを中心に据え、それに加え「勇気づけ」「不適切な行動への対処」「賞と罰を用いない育児方法」「話の聴き方」「感情の扱い方」などを実践的に学ぶ内容となっている。

Passage と SMILE に共通した内容の主なキーワードを列挙すると、次のようになる。

- 正の注目と負の注目
- 勇気づけ

- 不適切な行動への対処
- 賞と罰のない育児
- 話の聴き方
- 感情の扱い方
- 課題の分離
- 共同の課題
- 結末の体験
- 家族会議

ここで、「正の注目」は勇気づけの中の1つの技法であるため、形式的には「勇気づけ」と並列すべきでないのかもしれないが、Passage、SMILE共に勇気づけの中でも「正の注目」を中心的に扱っているため、ここではあえて「正の注目と負の注目」と「勇気づけ」を並記してある。

また、PassageとSMILEで扱い方が若干異なるため、共通のキーワードには挙げていないが、子どもへの頼み方や質問の手法として、次がある。

- 頼み方の4つのパターン
(主張的、非主張的、攻撃的、復讐的)
- 命令口調とお願い口調
- 意見ことばと事実ことば
- 開いた質問と閉じた質問

SMILEでは「頼み方の4つのパターン」を大きく扱うのに対し、Passageでは4つのパターンは参考ページで扱う程度であり、メインとしては「お願い口調」「意見ことば」「開いた質問と閉じた質問」などを学ぶ。なお、「お願い口調」も課題の分離と同様、野田が初めて導入した概念(手法)である。

2.5 PassageとSMILEの違い

これまで考察してきたように、PassageとSMILEは大きな原理が共通しており、学習方法としてはグループワーク型を採用し、両者ともアドラー心理学に基づく効果的な育児方法を体験的に学ぶことができるプログラムとなっている。

しかしながら、両者の間には幾分かの相違点もあるため、ここではそれらを見ていくこととする。

(1) 子育ての目標の明確化

Passageでは子育ての目標を、「行動面の目標」「心理面の目標」に分け、次のように明示されている。

- 行動面の目標
 - ① 自立する
 - ② 社会と調和して暮らせる
- 心理面の目標

- ① 私は能力がある
- ② 人々は私の仲間だ

「行動面の目標」及び「心理面の目標」は、子どもの主体性や社会の中での協働性を表しており、Passageはそこを明確にした上で構成されており、育児における目標の出発点となっている。そのため学習過程で何かあれば、常にこの目標に戻って考えることになる。そのようなことからPassageは、内容が論理的に整備されており、テキスト全体の理論的な整合性が明確となっている。

一方、SMILEはこのような「子育ての目標」が明確には明示されていない。逆に考えると、そのため常に出発点の目標に(アルゴリズム的に)戻る必要がなく、柔軟な内容及び運用を実現している。「主体性や社会における協働性」は育児や教育において重要な目標ではあるが、保護者によって価値観は様々であるため、最初から天下りのように強調しないで研修を受ける保護者が心理的に受け入れやすいともいえる。

この違いは、理論を重視する野田と柔軟な姿勢を重視する岩井・ベルグリーノのアドラー心理学観を反映していると解釈することもできる。

(2) 「共感」の扱い方

PassageとSMILEでは、「共感」の扱い方が異なる。SMILEでは「勇気づけ」を扱う第3章の第3節(ハンドアウト3-3)のタイトルが「勇気づけとは共感的に関わること」であり、「共感」という視点が明確に記述されている。

一方、Passageでは「共感」という視点がSMILEほど前面に押し出されていない。この相違点を分析するために、野田と岩井の「勇気づけ」へのアプローチの違いを考察する。野田は「勇気」ではなく「勇気づけ」自体を重視する傾向にある。それは、「勇気」というのは目に見えない主観的な働きであるが、「勇気づけ」は相手への行動(態度)を伴うため、観察可能だからである。つまり、科学というものは観察可能なものを扱うものであるという野田の学問観が表れている。そのようなニュアンスが反映している標語で、Passageのことをキャッチコピーとして「アドラー心理学にもとづく科学的でハートフルな育児法」ということもある。

これに対し岩井は「勇気づけ」だけでなく、「勇気」自体をも尊重している。たとえば、岩井(2011, 2013)においては、「勇気」を「困難を克服する活力」と定義した上で、「勇気づけ」を「困難を克服

する活力を与えること」と定めている。また、岩井(2013)においては、勇気の特徴を次の4つの観点から考え、勇気を持つことの大切さを主張している。

- ①「勇敢」とは違う勇気
- ②人生の課題を克服するのが勇気
- ③「にもかかわらず」の勇気
- ④絆の維持・回復のための勇気

これは、客観的な尺度では捉えられない人の「心」を尊重する立場だといえる。

このように考えると、PassageとSMILEにおける「共感」に対するニュアンスの違いが理解できる。すなわち、「共感」というのは主観的な働きで、客観的に観測しづらいため、Passageでは前面に押し出されていないと考えられる。

(3) エピソードを用いた実践課題

両コースとも、参加した保護者には課題がある。それは、親と子どもとの出来事を紙に書いて提出するものであるが、ここにも違いがある。

Passageは、子どもと親の会話を逐語的に記述するエピソード的な方式で統一されているのに対し、SMILEは必ずしも逐語的とは限らない。

これも観察可能な部分を重視する野田の立場と、柔軟に主観的な部分を捉える岩井の違いといえる。

(4) ニュアンスの違いや力点の置き方

PassageとSMILEはどちらも共通の大きな原理で全体が貫かれているが、ニュアンスや力点の置き方が若干異なる。既に述べたが、子どもへの頼み方に関して、SMILEでは「頼み方の4つのパターン」を大きく扱うのに対し、Passageでは4つのパターンより「お願い口調」や「意見ことば」などを中心に扱う。

感情の扱い方に関しては、「集中して学ぶ」もしくは「散りばめて学ぶ」かのニュアンスの違いがある。SMILEでは第5章で集中して学ぶのに対し、Passageではいくつかの章に散りばめられており、参考資料として書かれていることも多い。

また、SMILEでは「たての関係、よこの関係」「相互尊敬と相互信頼」を明確に扱うが、Passageでは参考ページに「タテの関係、ヨコの関係」として触れてはいるが、詳しくは発展講座であるPassage Plusで学ぶこととなる。

この違いは講座の位置づけにも関係すると解釈することができる。「たての関係、よこの関係」「相互尊敬と相互信頼」などは、カウンセラーを目指す者

には必須の概念であるが、SMILEは育児講座という位置づけだけでなく、カウンセラー養成の講座を受講するための必須講座という位置づけもある。すなわち、ヒューマン・ギルドにおいては、「SMILE」と「アドラー心理学・ベーシックコース」の2講座が、カウンセラー用の講座に進むための必須講座となっている。

一方、日本アドラー心理学会では、アドラー心理学基礎講座の「実践編」と「理論編」がカウンセラー養成に進むための必須講座となっており、Passageはカウンセラー養成講座の必須講座ではない。

制度的には、Passageはカウンセラー養成と直結していないが、内容としては発展講座であるPassage Plusがカウンセリングの技法である「エピソード分析」が盛り込まれた構成となっている。野田自身も、PassageとPassage Plusを完全にマスターすれば、(カウンセリングも含め)あらゆる場合に対応できると、個人ブログなどで力説している。

以上のように、PassageとSMILEは大きな原理としては共通しているが、若干の違いがみられ、それはPassageの改訂を担う野田とSMILEの改訂を担うヒューマン・ギルドのアドラー心理学観の違いを反映していると解釈することができる。ヒューマン・ギルドのアドラー心理学観は、代表の岩井と最高顧問であるペルグリーノのアドラー心理学観が大きく反映されている。

本論文では教育への応用を見据えて、PassageとSMILEを比較し、その類似点や相違点を考察してきたが、これはその優劣について言及しているわけではない。両者ともアドラー心理学に基づく育児を習得するにあたり有効なプログラムであると考えられる。

3. 数学教育への応用

3.1 臨床数学教育の提唱とその背景

(1) 臨床数学教育

蟹江(2001)は、「数学嫌いは、数学でないと癒せない」という信念のもと、現場感覚で数学嫌いの人々を癒すための教育概念である「臨床数学教育」を提唱した。これは実践を重視した概念であり、「数学を通して相手の心に触れ、心を耕すことで、数学嫌いを改善していく」という理念が蟹江(2001)に述べられている。数学による癒しの対象は「子どもたち」「学校の先生」「社会一般」である。

臨床数学教育は非認知的な能力に焦点を当てており、客観的に表すことが難しい能力を扱っている。

(2) 教師教育における数学者の役割

蟹江は数学科教員養成の実践や研究に尽力し、蟹江(2009)において教師教育における数学者の役割を主張し、そのモデルケースとしてクライン、フロイデンタール、バスなどの取り組みを詳細に調査した。彼らは数学者として卓越した数学研究を行った後、晩年に数学教育へ貢献することとなった。蟹江自身もまた、数学者として数学研究に取り組んだ後、数学教育に力を注ぐようになった。特に、蟹江の数学研究の業績として、土屋と共著で発表した論文 Tsuchiya, Kanie (1988) は、リー環などを用いて物理学の共形場理論を数学的に定式化する試みであり、その後の数理論理学に大きな影響を与えた。

(3) 数学科教員養成における養いたい力

元日本数学会会長である浪川は、名古屋大学から椋川女学園大学へ移り、教育学部数学コースを立ち上げる際に中心的な役割を果たした。また、浪川は数学科教員の持つべき数学リテラシーを研究し、浪川(2009)などで考察した。

このような流れの一環で、全国の教員養成に関わる数学者を中心に「教員養成数学科教育における育てたい能力」の研究が行われた。その結果、丹羽他(2009)において、中学・高校の数学教師を養成するためには、次のような能力が必要であると指摘された。

- ① 学校教育における算数・数学科の内容の背景にある数学の理論の本質を理解し、教科内容において重点をおくポイントおよび必要性の低さを的確に見抜く能力。
- ② 学校数学の内容における重要なポイントに対して独自の工夫を加え、内容を明確で分かりやすく説明できる能力。
- ③ 子どもの発言やつぶやき、またつまづきに含まれる発想の芽や本質的な点を見逃さず拾い上げ発展させる授業を展開できる能力。
- ④ 知的好奇心を呼び起こす教材や数学的活動を創意工夫して作りだし、子どもの興味・関心を引き出す授業を展開できる能力。
- ⑤ 数学の面白さや美しさを伝えて、子どもの興味・関心を育てる能力。
- ⑥ 子どもが数学を創造するような知的探求の場とする授業を実践できる能力。
- ⑦ 教科内容がどのように変更されようと、主体的な教材研究を行的確な対応ができる能力。

これらの能力を育成するには、単なる知識伝達型の授業では対応できないことは明白である。これらは客観的な尺度で表すことが難しい非認知的な能力であり、臨床数学教育の流れと一致しているといえる。

3.2 臨床数学教育の実践

(1) 臨床数学教育の取り組み

蟹江(2009)は臨床数学教育の実践を見据えて、教材面の開発を試作的に行っている。蟹江が提示した教材は、数学的な思考力が刺激される示唆に富んだものとなっている。

一方、本研究では教材面というより、指導方法に焦点を当て臨床数学教育の実現を探るのが目的である。具体的には、アドラー心理学に基づく教育方法を用いることで、数学への抵抗感を低くし、「数学嫌い」を減少させることを意図している。「勇気づけ」を軸とするアドラー心理学は、時代の要請にも合っており、臨床数学教育実現のための効果的な指導方法であると筆者は考える。

(2) 算数に対する臨床数学教育

教員養成算数科教育におけるカリキュラムの研究として、丹羽他(2013)は全国の小学校教員養成系大学で実施されている算数科教育を調査し、標準的なモデルの指針を提案した。

実践面の報告としては、松岡(2013, 2014)、松岡・日熊(2018)などがある。特に、松岡・日熊(2018)はアドラー心理学の手法に支えられたグループワークを用いた授業の報告であり、本論文と関連が深い。

小学校の保護者に対する算数の書籍としては、松岡(2020)がある。これは Passage と SMILE の両者から影響を受けた内容に、算数教育の視点を加えたものであり、保護者に対する臨床数学教育の取り組みといえる。

(3) アクティブ・ラーニングとアドラー心理学

アドラー心理学に基づくアクティブ・ラーニング型授業については、松岡・日熊(2018)に実践報告がある。この論文において、教師がクラスで次の2点を実現するための技量を身に付けるべく、自己研磨する必要があると提言されている。

- ①安全な場の創作
- ②すべてを受け取る

著者の1人である日熊は、琉球大学の授業科目「数理の構造」において上記の2つを心がまえとし

て授業を行った。受講者のほとんどが数学に苦手意識をもつ文科系の学生であったが、日熊はグループワークを中心に据え、学生の主体性を尊重し、「どんな的外れな意見に対してもその意見に至った考え（思考過程）を丁寧に聞く」という方針で授業を行った。すると、学生の意見の中には思わぬアイデアが含まれていることもあり、そんなときは「皆で拍手を送り承認をする」という方法を用いた。そのような勇気づけの授業を行った結果、「数学が少しだけ好きになりました」という感想が得られたという報告がある。

日熊は「今まで数学の授業によって、学生たちはどれだけ勇気をくじかれ、自己肯定感を失わされてきたのだろうか」という思いを持ち、勇気づけの重要性を主張している。

大学の教員養成における「勇気づけ」の実践は、現時点では散発的な取り組みであるため、今後系統的な実践研究・報告が望まれる。

4. 教育関係者への研修

4.1 実践型研修の必要性

(1) 実践的な研修の必要性

アドラー心理学に基づく教育に特化した書籍としては、野田・萩(2017)、岩井・永藤(2013)などがある。野田・萩(2017)において、アドラー心理学に基づく教育を実践するにあたり、次のことが書かれている。

- 生徒を勇気づける
- 生徒と尊敬・信頼し合える関係を作る
- クラスに協力原理を作る
- 安全な場を作る
- 民主的なルールを作る
- クラス会議を設定する

このような理想的な教育を実践しようとし、現場の教師が書籍を読み実践した結果、様々な問題が生じたと野田・萩(2017)では指摘されている。それはある意味当然で、実践を伴わずに知識だけで理解したことが原因であると野田は述べている。

野田・萩(2017)が提示したような教育を教師が実践するために、知識だけの学習では不十分なことは明らかである。アドラー心理学は実技としての側面が強く、「本からは学べない」と野田は様々な機会に指摘している。単なる知識ではなく実践できるレベルに達するためには、継続的に繰り返し研修に参加し技術を磨き、さらに手法が偏らないように(同じ内容を)複数の講師から習うことが望ましい

と野田は主張している。

「反復」「継続」「複数の講師」

教育関係者が研修に参加する際は、これらを意識することが望ましいと考えられる。これらを踏まえてアドラー心理学に基づく教員研修をデザインすることは、今後の課題である。

(2) 数学教育における「勇気づけ」の実現

日熊は数学の授業において、勇気づけの重要性を主張しているが、グループワークを用いて勇気づけを中心に据えた授業を展開するためには、教師自身の自己研磨(自己トレーニング)が必要であることを認めている。教師がこのような指導力を習得するためには、実践的な研修で身に付ける必要があるからである。

このようなことを踏まえ、本論文では次の提言をする。

教師が勇気づけの授業を展開するための自己研磨として、「勇気づけ」及び「グループワーク」を主体としたアドラー心理学に基づく育児分野の実践型研修が効果的である。

これは教師一般にいえることであるが、特に数学の授業は座学になりやすいため、数学教師がこのような実践型の研修を受ける意義は大きい。それに加え、勇気づけの技法が数学嫌いの減少に役立つと期待され、このような自己研磨が臨床数学教育を実践するにあたり効果的に働くと考えられる。

なお、本研究ではアドラー心理学の原理に基づく Passage または SMILE に準じるグループワークを中心に据えた研修のことを一般に「アドラー心理学に基づく育児分野の実践型研修」と解釈している。

現時点では、野田・萩(2017)、岩井・永藤(2013)などの書籍と併用して、Passage または SMILE 型の実践的な育児プログラムで研修を積むことが、教育関係者にとっての現実的な研修方法であるといえる。

将来的には、教育用の系統的なプログラムやテキストの開発及び実践型の研修体制の整備が望まれる。

4.2 研修機関の現状

本論文では、代表的な育児プログラムである Passage と SMILE をモデルケースに、研修機関としては日本アドラー心理学会、アドラーギルド、ヒューマン・ギルドなどを考察してきたが、他の研修機関

についても言及する。

なお補足をすると、日本アドラー心理学会はカウンセラー関連の研修講座をアドラーギルドに委託しているため、実際研修を実施している機関はアドラーギルドである。また、Passage, Passage Plus においては全国の講師（パッセージ・リーダー）が実際に開催している。

SMILE においては、ヒューマン・ギルドが直接開催する場合と全国の講師（スマイル・リーダー）が開催する場合がある。

(1) 日本個人心理学会

2019 年、アドラー心理学の研究と普及をおこなう心理学の学術団体として、「日本個人心理学会」が設立され、学術大会や研修会を開催している。

日本個人心理学会は新しい学会であるが、前身の「日本臨床・教育アドラー心理学研究会」を受け継いだ形の発足となっており、今後の展開が期待される。

(2) 日本アドラー心理学協会

日本アドラー心理学協会は梶野真を代表とする一般社団法人であり、福岡を拠点とし、アドラー心理学に関する研修やカウンセリングを行っている。

また、日本アドラー心理学協会は、ヒューマン・ギルド及びアドラー仲間たちの会の代表である水野美津子と協力して、シカゴ・アドラー心理学大学院教授のマリーナ・ブルヴシュタイン博士の講座を日本で開催するなどの取り組みを行っている。

4.3 研修実施の課題

一般的に、現在アドラー心理学の研修を行っている機関は、カウンセラーの養成や育児分野の研修は系統的に実施されている。しかしながら、教育の分野に関しては散発的な実施となっている。企業が研修を実施する場合、利益面などの課題があるため、単独での系統的な実施は難しい。そのため、教育委員会など公教育の機関との連携が必要である。

今後、アドラー心理学の学会や研修機関と教育委員会など公教育の機関が連携して研修を企画・実施することが望まれる。

5. 結論

本研究で明らかになった事柄を、「育児プログラムの考察」「臨床数学教育との親和性」「研修体制及びプログラム開発」の3つの観点から記述する。

(1) 育児プログラムの考察

本研究ではアドラー心理学に基づく育児プログラムのモデルケースとして、「Passage」と「SMILE」の内容を比較・分析した。

両者は、野田と岩井のアドラー心理学観により若干のニュアンスの違いはみられるが、大きな柱（原理）は共通しており、どちらもアドラー心理学に基づく効果的な育児を学ぶことができるプログラムであることが考察できた。

(2) 臨床数学教育との親和性

臨床数学教育は生徒の「心」に焦点を当てるため、実践が容易ではない。また、丹羽他(2009)が提案する中学・高校の数学教師を養成するための7つの能力は、臨床数学教育を実施するための能力ともリンクする非認知的な能力であり、習得することが難しい能力であるといえる。

教師がこのような指導力を習得するためには、実践的な研修で身に付ける必要がある。そのための自己研磨として、「勇気づけ」及び「グループワーク」を主体とする「Passage」「SMILE」型の研修が効果的であり、臨床数学教育との親和性が高いことを考察することができた。

(3) 研修体制及びプログラム開発

アドラー心理学に基づく育児分野におけるプログラムやテキスト、研修などは進んでいる。しかしながら、教育分野は書籍などはあるもののプログラム開発及び研修体制はそれほど進んでいるとはいえない。

教育の指導方法は実践的に習得しなければならず、今後、プログラム開発や研修体制の整備の必要性を考察することができた。

謝辞: 筆者が数学教育を実践するにあたり、アドラー心理学に基づく育児講座の内容が大いに役立っている。筆者が Passage を受けたときの講師である中井亜由美氏、Passage Plus の澤田裕子氏、SMILE の庭野静子氏に心より感謝申し上げる。

文献

- 1) 岩井俊憲 (2000), アドラー心理学によるカウンセリング・マインドの育て方—一人はだれに心をひらくのか—, コスモスライブラリー.
- 2) 岩井俊憲 (2011), 勇気づけの心理学 増補・改訂版, 金子書房.
- 3) 岩井俊憲 (2013), 失意の時こそ勇気を—一心の雨

- の日の過ごし方ー, コスモスライブラリー.
- 4) 岩井俊憲, 永藤かおる (2013), 子どもを勇気づける教師になろう!ーアドラー心理学で子どもが変わるー, 金子書房.
 - 5) 岩井俊憲 (2014), 人生が大きく変わる アドラー心理学入門, かんき出版.
 - 6) 蟹江幸博 (2001), 臨床数学教育を目指して, 三重大学教育学部研究紀要 第 52 巻, 教育科学, pp. 101-105.
 - 7) 蟹江幸博 (2009), 教師教育における数学者の役割ーRIMS 共同研究の目標と現状ー, 数理解析研究所講究録 Vol. 1657, pp. 1-22.
 - 8) 蟹江幸博, 佐波学 (2014), 数学の教育の個人的側面と社会的側面ー教育数学の構築に向けてー, 数理解析研究所講究録 Vol. 1920, pp. 4-76.
 - 9) 鎌田穰 (1993), STEP と SMILE にみられる親の支配的行動に対するアプローチの違い, 日本アドラー心理学会, アドレリアン第 6 巻第 2 号 (通巻第 11 号).
 - 10) 清野雅子, 岡山恵実 (2018), 3 歳からのアドラー式子育て術「Passage」, 小学館.
 - 11) つるたえみこ (2020), アドラーに救われた女性たちー親子関係・夫婦関係に悩むあなたへ, みらいパブリッシング.
 - 12) 中井亜由美 (2008), 自助グループ参加者の意識調査ー近畿地方の自助グループを対象にー, アドレリアン第 21 巻第 3 号 (通巻第 56 号).
 - 13) 浪川幸彦 (2009), 数学教員の持つべき数学リテラシーについての覚え書き, 梶山女学園大学教育学部紀要 Vol.2, pp. 41-49.
 - 14) 浪川幸彦, 竹内聖彦, 白井朗 (2011), 数学リテラシー概念に基づく数学教員養成カリキュラム改革の試み, 梶山女学園大学教育学部紀要 Vol.4, pp. 83-94.
 - 15) 浪川幸彦 (2012), 数学, 学ばるべきものー数学という学問から見た数学を学ぶ意義ー, 日本数学教育学会誌 Vol. 94, No. 11, pp. 22-25.
 - 16) 丹羽雅彦, 松岡隆 (2009), 教員養成学部の「数学」教科専門科目カリキュラムの現状把握と理想的モデル案に向けた調査検討の構想, 数理解析研究所講究録 Vol. 1657, pp. 74-82.
 - 17) 丹羽雅彦, 松岡隆, 川崎謙一郎, 大竹博巳, 伊藤仁一 (2010), 中学校・高等学校の数学教師の養成における数学専門科目の標準的なモデルの構想, 数理解析研究所講究録 Vol. 1711, pp. 106-129.
 - 18) 丹羽雅彦, 松岡隆, 川崎謙一郎, 大竹博巳, 伊藤仁一 (2013), 小学校算数科・教科専門科目の講義内容に関する現状調査の結果と標準モデルの提案, 数理解析研究所講究録 Vol. 1828, pp. 50-60.
 - 19) 野田俊作 (1998), 個人の主体性, アドレリアン第 11 巻第 3 号 (通巻第 25 号).
 - 20) 野田俊作・監修 (2002), アドラー心理学教科書ー現代アドラー心理学の理論と技法ー, 第 4 版, ヒューマン・ギルド出版部.
 - 21) 野田俊作 (2005), Passage 1.3 版, 日本アドラー心理学会.
 - 22) 野田俊作 (2016), Passage Plus version 2.0, 日本アドラー心理学会.
 - 23) 野田俊作 (2016), アドラー心理学を語る 1・2, 創元社.
 - 24) 野田俊作 (2017), アドラー心理学を語る 3・4, 創元社.
 - 25) 野田俊作, 萩昌子 (2017), アドラー心理学でクラスはよみがえる, 創元社.
 - 26) ヒューマン・ギルド, SMILEー愛と勇気づけの親子関係セミナーー (講座テキスト).
 - 27) フランシス・X・ウォルトン (2017), 子どもの協力をかちとる家庭と学校に生かすアドラー心理学, 井原文子, 北風洋子, 酒井朋子 (訳), 日本アドラー心理学会.
 - 28) 古庄高 (2001), アドラー心理学の学校教育への展開, 神戸女学院大学論集 第 48 巻第 2 号, pp.149-161.
 - 29) 古庄高 (2007), アドラー心理学と学校教育, 神戸女学院大学論集 第 54 巻第 2 号, pp.139-152.
 - 30) 松岡学 (2014), 小学校教員養成における興味・関心を育てる算数教育の取組み, 大阪樟蔭女子大学研究紀要 第 4 巻, pp. 147-157.
 - 31) 松岡学 (2015), 女子大学小学校教員養成における算数科教育の取組み, 大阪樟蔭女子大学研究紀要 第 5 巻, pp. 163-173.
 - 32) 松岡学, 日熊隆則 (2018), 教員養成におけるアドラー心理学に基づくアクティブ・ラーニング導入の試み, 滋賀文教短期大学研究紀要, No.20, pp. 24-35.
 - 33) 松岡学 (2019), 臨床数学教育へのアドラー心理学導入の試みと現状, 高知工科大学紀要, Vol.16, No.1, pp. 183-191.
 - 34) 松岡学 (2020), 5 歳からはじめるいつのまにか子どもが算数を好きになる本ーアドラー心理学でわかるー, スタンダーズ社.
 - 35) 三宅美絵子, 岩井俊憲 (2017), 幸せ親子になれるー0 歳からのアドラー流怒らない子育てー, 秀和システム.

- 36) ルドルフ・ドライカース, パールキャッセル (1991), 松田荘吉 (訳), やる気を引き出す教師の技量—管理・強制教師から民主的グループ・リーダーへ—, 一光社.
- 37) Tsuchiya, A. and Kanie, Y. (1988), Vertex operators in the conformal field theory on \mathbb{P}^1 and monodromy representations of braid group, *Advanced Studies in Pure Mathematics*, pp. 297–372.

Affinity between the Principles of Childcare Programs Based on Adler Psychology and Mathematics Education — Compare Passage and SMILE —

Manabu Matsuoka*

(Received: May 31st, 2021)

Department of Core Studies, Kochi University of Technology
185 Miyanokuchi, Tosayamada, Kami City, Kochi 782–8502, JAPAN

* E-mail: matsuoka.manabu@kochi-tech.ac.jp

Abstract: In this paper, we investigate the principle of programs in the field of childcare based on Adler psychology, aiming to apply it to the field of education. Specifically, we shall compare and discuss the similarities and differences between “Passage” and “SMILE”, which are typical model cases of popular childcare programs in Japan. Regarding education, we will consider the applicability of Adler psychology, especially from the standpoint of clinical mathematics education. Since clinical mathematics education focuses on non-cognitive abilities, it is considered to have a high affinity with Adler psychology. Finally, we shall consider the training system for educators to acquire educational methods based on Adler psychology.